

佐橋法龍著

人間道元

春秋社刊

人間道元

序

禅は思想ではない——と考えている人々が少なくない。しかし、この種の思想のもちぬしは、実は、思想の何たるかを解していない。思うに、思想には、性格的にみて二種類がある。その一つは、自己の生きる営みとは、なんの関係もない思想である。仏教では、この種の思想を戯論けろんというが、禅を思想ではないと考える人々のいう思想も、いつてみればこれである。

もう一つの思想は、人が生（人生）を耐えてゆくための、なくてはならない思想である。思想的に生きることは、人間にとって必ずしも幸福なことではない。だが、そうと知りつつも、やはりそうせずにはいられない、つらさ、せつなさ、この種の思想を抱く人々にはある。道元がそれである。むろん道元だけではない。キルケゴールとかニーチェという、実存の思想家たちもそれである。

道元は、思想と人格（生活といってもよい）の分離を、徹底して嫌った人である。道元にとって、自己そのものとして、生活的に把握されない単なる思想（観念）は、思想とはいえない。その意味では、「主体性が真理である」といった、キルケゴールの実存の立場に通ずる。実存の立場における主体性も、究極的には、宗教的な魂の根源的自由をめざしており、禅の悟境に近いともいえる。しかし、そこにいたる道程となると、禅と実存哲学とでは、当然のことながらそれぞれの特徴があって、内

容的にかなりの相違がある。

実存の立場では、思想と実践（主体性）は、たとえば「石蹴り遊び」のように、石（思想）を一步先へ蹴り、自分（実践）がそこに追いつくと再び、石をもう一度先へ蹴る。これをくり返ししながら、究極の地点にいたろうとする。したがって、「思想を主体化する」とか、「主体性のなかから思想を生んでゆく」という修練が、きわめて重要になる。みじかで卑俗な自己から出発し、段階を追って宗教的自由の高みに登ってゆく。ところが禅は、「一超直入如来地」で、見性悟道を通じて、一足とびに究極の境地にいたろうとする。

この両者それぞれの特徴は、同時に、両者それぞれの欠陥ともなる。実存の立場では、思想と実践の密着した生き方を、俗世間である歴史的・社会的状況のなかからはじめる。したがって、歴史的世界における人格的対応には強い反面、究極のところまでゆきつかない中道で挫折する危険が大きい。禅では、頓悟して、宗教的自由の体験をまず果たしてしまうため、そのあとにおこなわれるべき思想的修練を、ないがしろにする傾きが生じやすい。還相面への思想的な弱さがめだつ。

だが、道元の場合は、一概にこうした批判をあてはめることはできない。帰朝後の道元においては、思想は、まさしく前にむかって蹴られた石のようなもので、これに全自己をかさねあわせようとする異常な努力が、常にあとにつづいている。キルケゴールのいう「反復」（考えたとおりに在ろうとすること）にも等しい、勇気のある、しかも誠実そのものの生き方である。このような、自己に忠実な生き方をした禅者は、禅宗史上まことに類例に乏しい。絶無といってもよい。ここに私は、道元の偉大さをみる。

「入宋伝法沙門」をふりかざした、帰朝直後の道元には、若き故の傲りがあった。だが、世の辛酸を経、理論と現実の乖離や人間の弱さ脆さを自己について知り、悟りの眼と人格が容易に一つになり難いことを体験すると、改めて道元は、思想と自己の完全な一致を激しく求める。入越を境に、それまでの出家在家無差別の理想論を一擲して、強く超俗的な出家至上主義に傾斜していったのが、それである。そして最後に、一箇半箇を対象とした「威儀即仏法」「作法是宗旨」の世界にたどりつく。「威儀即仏法」は、思想の完全な人格化（生活化）にはかならない。

道元の人と思は、変化しつつ深まっている。その変化と深まりの道程のなかに、道元その人の真の骨髄がある。したがって、道元を理解は、一般の禅理解が「如何にして大悟したか」を中心にするのとは異なり、むしろ悟後の人と思想の深化に焦点を定めて、なされねばなるまい。

本書は、こうした立場から、道元の人と思想の変化と深まりの道程を、私なりにとらえてみたものである。もとより、人間の理解は自己の理解が根底になる。その意味では、未熟きわまる私が偉大な道元を理解しようとすること自体に、無理がある。だが、私はそれをおこなった。人間道元のなかに、おなじ人間としての自分の、生きる支えを見出したからである。大方のご賢察とご叱正を乞いたい。

また、本書は、しばしば医学的心理学を参考にして、道元とその周囲の人々の性格を考察している。しかしこれは、精神医学とか心理学の門外漢である私が、それによって一種のパトグラフィ（pathography 病跡学）を試みたということではない。本書における道元理解の軸は、精神医学でもなければ心理学でもなく、あくまでも私なりの道元観であり人間観（人間認識）である。それとい

ま一つ禅観である。医学的心理學は、それを補ったものでしかない。かえりみると、私が、宗教界の日刊紙『中外日報』に寄稿した論文で、道元を分裂気質の人とかいて物議をかましたのは、十年前(昭和三十六年三月)のことになる。そんなころから私は、好んで心理学の書物を読んで来たが、所詮は門前の小僧である。忌憚のない大方のご教示が頂ければ幸である。

本書は、脱稿後、春秋社の神田龍一、山折哲雄の両氏に通読を乞い、幾多の貴重な忠告を頂いた。また愚弟文寿にも一読させ、多くの助言を得ている。もし本書に多少ともみるべきところがあるとすれば、それはひとえに、これらの忠告・助言にしたがって、加筆修正を施した結果である。ことに文寿は、恩師秋山英夫先生の知遇を得て、多年ニ―チエを学んできた男で、愚弟ながら私には実存哲学の師である。また、題字を頂戴した、拙院の本寺(本山)奥伊豆曹洞院の山主伊藤仁重老大師は、修禅寺の丘宗潭・丘球学両師の会下において、禅余深く大師流の書を研鑽された、洞門屈指の名筆である。上梓にのぞみ、神田、山折、伊藤の三氏と愚弟文寿に、衷心より謹んで謝意を表する。

昭和四十五年五月一日

豆陽観音峰下金剛禅院の丈室にて

佐 橋 法 龍 識

序	5
---	---

序章

虚像のむなしさ

14

第一章

道元の遍歴

38

第二章

栄西と道元

65

追求された人間道元	14	里見弴の挑戦	17
-----------	----	--------	----

道元初発心の動機	20	文学と史学の間	23
----------	----	---------	----

虚像のむなしさ	26	禅僧の虚像と大衆文学	29
---------	----	------------	----

虚像と実像(上)	32	虚像と実像(下)	35
----------	----	----------	----

道元の出生	38	おいたちと出家	41
-------	----	---------	----

第二の転機	44	あやふやな教学	47
-------	----	---------	----

とりのこされる本質	49	一途な人々「道元と公胤	52
-----------	----	-------------	----

理法と実在	55	仏法の真理	58
-------	----	-------	----

思想と現実「天台と禅	61
------------	----

体験の世界	65	機縁かなわず	68
-------	----	--------	----

栄西の性格	71	躁鬱質の俊秀	75
-------	----	--------	----

道元の語る栄西	78	禅者の自殺	82
---------	----	-------	----

第三章 明全と道元

90

禅機と気質 85

建仁寺明全に随従 90 非情な真実の学道 93

明全の戒律第一主義 96 公案の観念性 100

はずかしがる道元 103 理論と現実の溝 105

明全・道元と承久の変 110 つめたい道元 112

道元のあたたかさ 115

第四章

入宋求法

—真禅をもとめて—

119

船中問答 119 日常底への没入 122

禅の自然主義 125 作務即弁道 128

低迷する道元 131 嗣書へのあこがれ 134

道元の形式主義 137 道元 of 精神感受性 140

分裂質の人間と思想 142

(付) 禅宗略系譜 145

第五章

尋師訪道

149

— 看話禪と默照禪と如浄 —

默照禪と看話禪

149

漸翁と道元

152

大慧派への失望

154

話三昧と趙州無

158

無と道元と看話禪

161

漸翁の超俗主義

164

道元と如浄の邂逅

167

如浄の虚像と実像

170

如浄の人と禪

172

第六章

空手還郷

177

— 坐禪と非思量の世界 —

道元の大悟

177

身心脱落と心塵脱落

180

修道の理論と現実

183

道元の嗣法

186

帰国した道元

189

『普勸坐禅儀』

192

非思量

195

思量の否定

198

非思量と趙州の無

201

第七章

挫折した理想主義

204

— 深草における思想と行動 —

深草への閑居

204

意志と性格

206

叡山の迫害

209

誇り高き道元

211

道元の理想主義 — 在家成仏論

214

道元の理想主義 — 男女平等論

217

第八章

沙門道元(上)

―入越と道元下の人々―

236

第九章

沙門道元(下)

―永平の仏法―

260

参考文献について

287

道元の哲学的思索―否定即肯定 220

道元の哲学的思索―非連続の連続 224

理想主義の挫折 227 道元の決意 229

道元とむなしさ 232

道元の防衛反応 236 五家の否定 240

激しい感情 242 寂円と懷莽 245

懷莽の性格 248 詮慧と僧海と懷鑒 251

道元と懷鑒 254 波多野義重 257

不透明な道元 260 威儀即仏法 263

大悟を待たず 266 無心の没入 268

道元の自負 272 鎌倉行化 275

痛哭する道元 278 覓めすぎた人 281

序 章 虚像のむなしさ

追求された人間道元

「正治二年（一二〇〇）二月二日、京都は風雨が烈しかった。九条兼実は、この日のことを日記『玉葉』に、

景時討伐は必然と云々。天下の悦びなり。積悪の輩、数を尽くして滅亡す。趙高独り運未だ消えず、如何と云々。（原漢文）

と書きとどめた」

これは、私の畏敬してやまない先学竹内道雄の労作『道元』（「人物叢書」吉川弘文館）冒頭の一節である。地味な学究のかいた道元伝にしては、著しく文学的なきだしである。

人一倍猜疑心の強かった源頼朝に讒言をして、義経を悲運のどん底においこんだ、姦佞な人物と伝えられる梶原景時の敗死を、兼実は有頂天になって悦んでいるが、実際に景時が、伝えられるほど姦佞であったかどうか、深く景時の内面に立ち入ってみなければ、一概に流説を信ずるわけにはゆかない。海音寺潮五郎の『悪人列伝』（巻上の「梶原景時」の章）のごとき、必ずしも景時を姦佞邪

悪な人物とはみていない。だが兼実、頼朝びいきでありながら、同時に義経にも非常な好意と評価を抱いていた。したがって、義経を悲劇の英雄にしたてあげたといわれる景時については、よほどの悪人とみて、激しく憎悪していたものらしい。景時の敗死を、「天下の悦びなり」などといっているのが、それである。

もっとも、この景時については、別に深入りする必要も意志もない。この論考の主題である道元とは、特に関係はない。竹内が、『玉葉』のこの一節をあえて『道元』の冒頭にかかげた意図は、

(1) 兼実が、関白というおのれの絶大な権勢の座を覆くつがえした、秦の始皇帝の佞臣趙高にも比すべき姦佞邪悪な男として、景時にも増して、ひたすら憎みつづけた源博陸（博陸は関白の唐名）久我（こが）通親（みちちか）（一一四九～一二〇二）こそ、ほかならぬ道元の実の父だったということ。

(2) そうした通親を含む道元の俗系が、道元の後年の宗教活動ないし人格形成の上に、微妙な影響をもたらしはしなかったか——という一つの課題。

この二点を、道元の伝記をかきおこすにあたって、まず提起することにあつたといえよう。これは、竹内が、宗祖伝・高僧伝にありがちな虚飾をかなぐりすてて、人間として、道元を如実にみつめようとしたことを物語る。

通親はたしかに、陰險悪辣な手段を縦横に駆使して、醜い、しかし深刻な、廷臣たちの権力争奪の世界を生きぬいた男である。かなりの好色でもあり、正妻範子の歿後、その連れ子で、通親の養女となった承明門院在子（土御門天皇の母）をも愛するという、奔放な女性遍歴もしている。こうした通親を、慈円（兼実の弟、一一五五～一二三五）は「謀略邪智」の男と痛罵し、承明門院とのことも、

「承明門院をぞ、母うせて後はあいし参らせける」（『愚管抄』）と嘲っている。

しかし、この程度のことは、当時の堂上貴族として、それほど珍らしいことではない。それに慈円は、兼実の弟であり、建久七年（一一九六）通親の策謀で兼実が失脚したとき、ともに天台座主の地位をおわれている。終生通親には深い恨みを含んでいた男であるから、そのことばだけで、一概に通親を姦佞邪惡な男ということもできまい。慈円にしても、出家の身でありながら、ずいぶん政界の陰で動いている。しかも、当然のことながら、通親には嘖々たる好評もある。

「その日（通親急逝の日＝筆者注）、酉の刻ばかり、御遊びはてて、まかり出でさせ給ひて、その夜、夢のやうにはかなくならせ給ひにき。世の中の御後見、また肩を双ぶる人もなき。院中はさらにもいはず、民百姓にいたるまで、いはけなき子の、母を失へるが如く、世のなかのさわざにて、惑ひあへり」（『家長日記』）

だが、いずれにしても、この通親と伊子（木曾義仲との暗い過去をもつ道元の母）は、ある意味で、道元伝の恥部である。それを竹内は、まず露堂堂と提起している。彼の『道元』には、従来の道元伝一般の型を破る、漸新な意欲と手法がみられる。

竹内の『道元』が上梓されたのは、昭和三十七年五月のことであるが、四十四年五月に刊行された、高崎直道・梅原猛の共著『古仏のまねび＝道元V』（「仏教の思想」十一、角川書店）は、竹内のとった人間道元追求の姿勢をうけついだものである。ことに、梅原の担当した第三部「道元の人生